

高等学校「家庭」における主体的・対話的で深い学びを目指す ICTを活用した授業開発 (I)

—「なぜ、金銭を計画的に使う必要があるのか」の開発と実践—

佐藤 園 ・ 長谷川千華*

本継続研究では、2016年の知識基盤社会を生きる力の育成を目的とした教育改革において、「社会に開かれた教育課程」の実現のために、授業改善の課題とされた「主体的・対話的で深い学びの実現」と「適切なICT活用による学習活動の充実」に焦点を当て、高等学校普通科目の家庭科において、「主体的・対話的で深い学び」とそれにつながるICT活用の検討による授業開発研究を行い、「主体的・対話的で深い学び」を成立させる授業構成の条件を検討することを目的とした。本稿では、家庭科の「深い学び」に不可欠な家庭経営学習の目的である「自分と金銭との関係」を探究する授業「なぜ、金銭を計画的に使う必要があるのか」の開発と実践結果を中心に報告する。

Keywords：家庭科，主体的・対話的で深い学び，ICT，家庭経営学習，高等学校

I. はじめに—問題の本質と研究の目的—

1. わが国における教育改革と「深い学び」

(1) 学習指導要領改訂の方向性

2016年の中央教育審議会答申（以下、「答申」と称す）では、知識基盤社会を生きていくためには平成10年の学習指導要領改訂時から育まれてきた「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通じて確実に育むことが重要であるとしている¹⁾。そのためには、「社会に開かれた教育課程」の実現が必要であり、学習指導要領では、①学びの地図としての枠組みづくり、②カリキュラム・マネジメントの実現、③主体的・対話的で深い学びの実現（以下、「深い学び」と称す）、の3点にわたる改善・充実が求められた²⁾。特に、③「深い学び」の実現では、子どもたちが「どのように学ぶのか」を追求し、主体的に、対話的に、深く学んでいくことによって、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解したり、未来を切り拓くために必要な資質・能力を身に付けたり、生涯にわたって能動的に学び続けたり

することが期待できるとして、この視点での授業改善の取り組みの活性化が目指されている³⁾。

さらに、「答申」では、情報化に伴い、社会生活でICTを日常的に活用することが当たり前となる中で、学校の生活や学習においても、日常的にICTを活用できる環境づくりを行うとともに、ICTの特性・強みを「深い学び」の実現につなげることが重要だとし、学びの質を高めるICTの活用方法についての実践的研究と成果の普及が求められている⁴⁾。

(2) 高等学校教育における「深い学び」の実現とICT活用

「答申」を受け、高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説総則編においては、「深い学び」の実現に向けた授業改善⁵⁾と、ICTの日常的・効果的な活用に必要な環境整備の実施及びICTを適切に活用した学習活動の充実が求められている⁶⁾。ICT活用に関しては、教師は授業づくりの際に、コンピュータ等の教育機器を活用し、個に応じた指導の充実や学校相互間の連携や交流の実施などを行う

岡山大学学術研究院教育学域 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

*岡山県立岡山御津高等学校 709-2133 岡山市北区御津金川940

Research on ICT-Based Class Development for “Proactive, Interactive, and Authentic Learning” in “Home Economics” at Senior High School (I): Developing and Implementing a Lesson on “Why We Need to Plan to Spend Money”

Sono SATO and Chika HASEGAWA*

Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

*Okayama Mitsu Senior High School, 940 Mitsu-Kanagawa, Kita-ku, Okayama 709-2133

ことが期待されている。さらに、そのようなICT活用を通して、子どもたちの「情報モラルを含む情報活用能力の育成」を行うことも求められている⁷⁾。

高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説家庭編においても、授業における「深い学び」の実現⁸⁾と生活に関わる外部の様々な情報を収集して活用することやデータ整理など指導の各場面において、コンピュータ等の情報機器や情報通信ネットワークなどを積極的に活用し学習効果を高めるようにすることが重要視されている⁹⁾。

(3) GIGAスクール構想の実現

これらを実現するために、文部科学省は、2019年にGIGAスクール構想を発表した。

この構想は、1人1台端末の導入と高速大容量のネットワークを一体的に整備することで、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化し、資質・能力が一層確実に育成できる教育ICT環境を実現し、これまでの教育実践と最先端のICTのベストミックスを図ることにより、教師・児童の力を最大限引き出すことを目的に実施されている¹⁰⁾。

(4) 学校教育におけるICT活用の課題

一方で、学校教育でのコンピュータ活用に関する世界レベルの調査では、その課題も明らかになっている。

OECDのPISA2012のビック・データを活用したPISA調査委員会の結果では、学校でもコンピュータの活用時間が長時間になると、読解リテラシーにおいても数学リテラシーにおいても学力が低くなっていた。結果として、学校におけるコンピュータ活用時間と学力テストの結果とは逆相関を示しており、ICT教育による学びは、一般に期待されているような効果をもたらしてはいなかった。この結果に対して、PISA調査委員会は、「コンピュータは情報や知識の獲得や浅い理解には有効だが、深い思考や探究的な学びには有効でない」という解釈で答えている¹¹⁾。

これに対して佐藤学は、調査委員会の解釈は妥当であり、コンピュータ活用は、新しい情報や知識を獲得したり、意味を理解するには有効であるが、それらを活用して問題解決を行ったり、批判的思考や探究的思考を発展させる学びには有効とは言えず、批判的思考・探究的思考による学びは、顔と顔をつきあわせて行う協同的な学びが最も有効である、としている。

それに加えて、佐藤学は「現在のコンピュータの活用の仕方がまちがっている」という解釈を示している。具体的には、コンピュータが教

育に導入されて以来形成されてきた二つの対立する伝統一コンピュータを「教える道具」と「学びの道具」とする教育—について説明し、現在普及しているICT教育プログラムのほとんどは、コンピュータを「教える道具」として活用しているが、コンピュータは「学びの道具（思考と表現の道具）」として活用した時、教育効果を発揮するとして、コンピュータを「教える道具」ではなく、「学びの道具（思考と表現の道具）」あるいは「探究と協同の道具」として活用する方途を探索する必要がある、と指摘している¹²⁾。

2. 本継続研究の目的と方法

それでは、そもそも「深い学び」とは何なのか。それを高等学校「家庭」で実現するためには、どのような授業構成理論を用い、その学びの中にどのようなICT活用を組み込んでいけばよいのか。この問題意識から、本継続研究では教科教育学研究の開発的・実践的研究方法論に基づき、①「深い学び」につながるICT活用の検討と、②高等学校「家庭」における「深い学び」の検討を行い、①②から「深い学び」を目指すICTを活用した家庭科の授業開発を行うことを目的とした。

3. 研究の場と研究計画

岡山大学教育学研究科教職実践専攻では、教育現場の課題について理論と実践の架橋・往還を通してマネジメントし遂行できる総合的・実践的な力量を育成するために、学部新卒学生に対して、「学校における実習」と「教育実践研究」をコアとしたカリキュラムを編成している。「学校における実習」は、1年次では連携協力校において、自己が設定した課題を探究する3段階の実習、課題発見実習（6～7月に10日間）→課題解決実習（9月に10日間）→課題探究実習（10～11月に15日間）として実施される。2年次では、希望学生に対して、協力校において「教育実践特別実習A（1・2学期）」「教育実践特別実習B（3・4学期）」が準備されている¹³⁾。

本継続研究は、表1に示すように、長谷川が大学

表1 研究の場と研究計画

学校現場での授業実践等	実習校 実習名	1年次 岡山県立A高等学校（連携協力校）			2年次 岡山県B高等学校
		課題発見実習（10日）	課題解決実習（10日）	課題探究実習（15日）	
		令和4年6月6日（月）～10日（金）、15日（水）、22日（水）、29日（水）、7月6日（水）、13日（水）	令和4年9月5日（月）～16日（金）	令和4年10月21日（金）～11月11日（金）	令和5年10月18日（水）～11月8日（水）
		令和4年6月6日（月）～10日（金）、15日（水）、22日（水）、29日（水）、7月6日（水）、13日（水）	令和4年9月5日（月）～16日（金）	令和4年10月21日（金）～11月11日（金）	令和5年10月18日（水）～11月8日（水）
授業実施学年等 授業実施科目 [※] 題 材 使用教科書	授業参観 ICT活用の実態把握	学年：2年 家庭総合			学年：1年 家庭基礎
		家庭経営 「家計のマネジメント」			食生活 「家族の食事計画」
		『家庭総合 自立・共生・創造』（東京書籍）			『家庭基礎 自立・共生・創造』（東京書籍）
		『家庭総合 自立・共生・創造』（東京書籍）			『家庭基礎 自立・共生・創造』（東京書籍）

※高等学校「家庭」では、普通科目として、生徒の多様な能力、適性、興味・関心等に応じて選択して履修させることを重視し、「家庭基礎」（2単位）、「家庭総合」（4単位）の2科目が設けられている。これらの2科目のうちいずれか1科目を必修科目として履修することになっている。

院1年次で配属となった連携協力校である岡山県立A高等学校、2年次では実習協力校ではなく、長谷川が非常勤講師として授業を行った岡山県B高等学校で実践研究を行った。

課題発見実習では、授業を参観し、ICT活用の実態把握を行い、実習終了後、結果の分析と効果的なICT活用の検討及び高等学校「家庭」における「深い学び」の検討を行った。課題解決実習と課題探究実習では、2年生を対象に、「家庭」における「深い学び」を目指すICTを活用した授業を開発し、実践した。この成果と課題を踏まえ再検討した家庭科授業を、岡山県B高等学校の1年生を対象に実践した。

本稿では、1年次の課題発見実習と課題解決実習での実践とその結果について報告する。

Ⅱ. 授業における効果的なICT活用の検討

1. 授業におけるICT活用の検討枠組み

（1）学習場面におけるICT活用の類型

文部科学省では、総務省と連携し、1人1台の情報端末、電子黒板、無線LAN等が整備された環境の下で、ICTを効果的に活用して、子供たちが主体的に学習する「新たな学び」を創造するための実証研究「学びのイノベーション事業」（平成23～25年度）を行い、その成果や課題を報告している。その中の「ICTを活用した指導方法の開発」では、ICTを活用した授業においては「一斉学習」、「個別学習」、「協働学習」それぞれの学習場面が相互に組み合された学びの場が形成され、ICTの特長を生かすことでより分かりやすく理解が深まる授業の実現が可能となる」として、表2に示すように各学習場面におけるICT活用を類型化し、そのポイント及び

実践事例を紹介した「学習場面におけるICT活用の類型」を示している¹⁴⁾。

（2）SAMRモデル

SAMRモデルは、ICTを授業で活用する場合に、そのテクノロジーが従来の教授方略や学習方略にどのような影響を与えるかを示す尺度であり、Ruben R. Puenteduraによって考案され、三井によって日本語に意識されている。

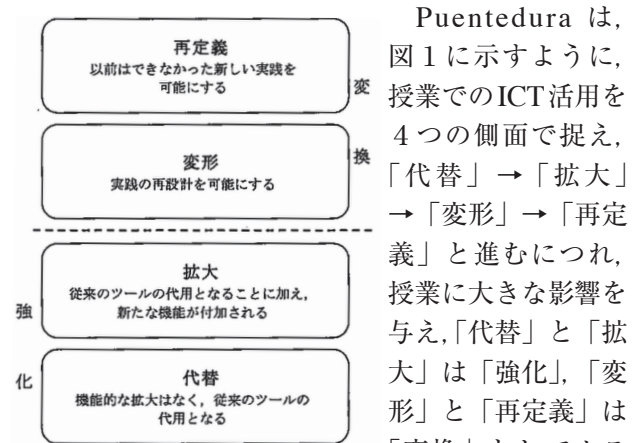


図1 SAMRモデル

Puentedura は、図1に示すように、授業でのICT活用を4つの側面で捉え、「代替」→「拡大」→「変形」→「再定義」と進むにつれ、授業に大きな影響を与え、「代替」と「拡大」は「強化」、「変形」と「再定義」は「変換」としてカテゴライズできるとしている。

ている。

三井は、SAMRモデルを分析し、その尺度を用いて、初等教育におけるICTを活用した実践の分類、整理を試みている。その結果から、SAMRモデルの尺度を基に考えることで、ICTを活用する場面を取捨選択しやすくなり、授業設計や学習設計が行いやすくなる。さらに、ICTを活用した授業を学校現場で推進していくためには、「拡大」以上のメリットを伝えていく必要がある、と述べている¹⁵⁾。

（3）授業におけるICT活用レベル尺度

（1）（2）から、授業におけるICT活用を、活用の質と学習場面の両面から検討できる「授業場面におけるICT活用レベル尺度」を作成した（表4参照）。この尺度を用いて、授業におけるICT活用の実態と課題を把握することとした。

表2 ICTを活用した学習場面の類型

A 一斉学習	B 個別学習	C 協働学習
挿絵や写真等を拡大・縮小、画面への書き込み等を活用して分かりやすく説明することにより、子供たちの興味・関心を高めることが可能となる。	デジタル教材などの活用により、自らの疑問について深く調べることや、自分に合った進度で学習することが容易となる。また、一人一人の学習履歴を把握することにより、個々の理解や関心の程度に応じた学びを構築することが可能となる。	タブレットPCや電子黒板等を活用し、教室内の授業や他地域・海外の学校との交流学習において子供同士による意見交換、発表などお互いを高めあう学びを通じて、思考力、判断力、表現力などを育成することが可能となる。
A1 教員による教材の提示  画像の拡大提示や書き込み、音声、動画などの活用	B1 個に応じる学習  一人一人の習熟の程度に応じた学習 B2 調査活動  インターネットを用いた情報収集、写真や動画等による記録	C1 発表や話し合い  グループや学級全体での発表・話し合い C2 協働での意見整理  複数の意見・考えを議論して整理
B3 思考を深める学習  シミュレーションなどのデジタル教材を用いた思考を深める学習	B4 表現・制作  マルチメディアを用いた資料、作品の制作 B5 家庭学習  情報端末の持ち帰りによる家庭学習	C3 協働制作  グループでの分担、協働による作品の制作 C4 学校の壁を越えた学習  遠隔地や海外の学校等との交流授業

2. 実習校におけるICT活用の実態と課題

（1）実態調査の実施

調査は、A高等学校のICT活用に関する実態と課題を把握し、1年次2・3回目の実習において家庭科の授業設計と実践を行うことを目的に実施した。

調査日は、令和4年4月6日(月)

～10日（金）、6月15日（水）、22日（水）、7月6日（水）、13日（水）の計9日間である。調査方法は、A高等学校で授業を参観し、授業の中でのICT活用を「授業場面におけるICT活用レベル尺度」を用いて分析した。参観する授業は、生徒や教員からICTを積極的に活用している授業について聞き取りを行った上で選択し、担当教員から許可が得られた授業を参観した。

（2）調査結果：ICT活用の実態と課題

①参観した授業とICT活用

表3に示すように、参観できた授業は44である。そのうち36の授業でICTを活用していた。

36の授業におけるICT活用を検討し、尺度を用いて分類した結果が表4である。一斉学習と個別学習での「強化」レベルの活用が多く、協働学習や「変換」レベルでの活用は、殆んど見られなかった。

表3 参観授業科目一覧

年／組	授業科目名	ICT	年／組	授業科目名	ICT
1／6	ファッション造形基礎*	○	3／9	子どもの発達と保育*	×
3／7・8	子ども文化*	×	1／6	生活産業基礎*	○
3／7・8	食品*	×	1／2	数学Ⅰ	○
3／8	生活基礎*	×	1／7	UHR	×
3／3	家庭総合*	○	2／4	家庭総合*	○
3／6・7	リビングデザイン*	○	1／4	家庭基礎*	○
2／6	フードデザイン*	○	1／7	書道Ⅰ	○
3／1～6	課題研究（Web作成講座）	○	1／2	現代の国語	○
3／7～9	課題研究（和服講座）*	○	3／9	服飾手芸*	○
1／8	生活産業基礎*	○	1／8	ファッションデザイン*	○
2／7	生活と福祉*	○	2／4	家庭総合*	○
1／1	数学Ⅰ	○	1／7	家庭基礎*	○
1／2	現代の国語	○	1／3	論理表現Ⅰ	○
3／5	家庭総合*	○	3／7・8	消費生活*	○
1／7	フードデザイン*	×	1／6	現代の国語	○
3／7～9	課題研究（PC講座）	○	2／4	家庭総合*	○
1／6	家庭基礎*	○	2／8	生活産業情報*	○
3／4	コミュニケーション英語Ⅲ	○	1／7	講演会	○
2／3	家庭総合*	○	3／7・8	暮らしとデザイン*	×
3／9	世界史A	○	3／4	家庭総合*	○
3／2	家庭総合*	○	2／2	原価計算	×
1／7	ファッション造形基礎*	○	1／8	ファッションデザイン*	○

*は、家庭科関係授業科目

②家庭科授業におけるICT活用

以上の結果から、家庭科関係授業のICT活用を抽出すると表5になる。家庭科では、個別学習での活用も見られるが、多くは一斉学習における「代替」レベルの活用であり、協働学習や「変換」レベルでの活用は、殆ど行われていなかった。

③学年別授業におけるICT活用

さらに、表4を学年別で分類すると表6になる。1年と3年の授業では多様なICT活用が行われていたのに対し、2年では、一斉学習での「強化」の活用が75%を占めていた。

④ICT活用の実態と課題

以上の参観できた授業の分析結果からは、授業では、一斉学習と個別学習において「強化」レベルでICTが活用されており、家庭科授業と2年生の授業では、一斉学習での「代替」レベルでの活用が中心

表4 A高等学校の授業におけるICT活用の実態

学習場面		A ^{※1} (一斉)					B ^{※2} (個別学習)					C ^{※3} (協働学習)			
		A1	B1	B2	B3	B4	B5	C1	C2	C3	C4				
強	代 替 (S)	22	2	5	1	4	1	0	0	0	0				
	機能的な拡大はなく、従来ツールの代用														
化	拡 大 (A)	9	0	0	0	0	1	1	1	1	0				
	従来ツールの代用に加え新たな機能付加														
変	変 形 (M)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	実践の再設計を可能にする														
換	再定義 (R)	0	0	0	0	2	0	0	0	1	5				
	以前はできなかった新しい実践が可能														

※1 A：一斉学習 A1：教員による教材提示

※2 B1：個に応じる学習 B2：調査活動 B3：思考を深める学習 B4：表現・制作 B5：家庭学習

※3 C1：発表や話し合い C2：協働での意見調整 C3：協働制作 C4：学校の壁を越えた学習

表5 A高等学校の家庭科授業におけるICT活用の実態

学習場面		A ^{※1} (一斉)					B ^{※2} (個別学習)					C ^{※3} (協働学習)			
		A1	B1	B2	B3	B4	B5	C1	C2	C3	C4				
強	代 替 (S)	19	0	2	1	2	1	0	0	0	0				
	機能的な拡大はなく、従来ツールの代用														
化	拡 大 (A)	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0				
	従来ツールの代用に加え新たな機能付加														
変	変 形 (M)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	実践の再設計を可能にする														
換	再定義 (R)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1			
	以前はできなかった新しい実践が可能														

※1 A：一斉学習 A1：教員による教材提示

※2 B1：個に応じる学習 B2：調査活動 B3：思考を深める学習 B4：表現・制作 B5：家庭学習

※3 C1：発表や話し合い C2：協働での意見調整 C3：協働制作 C4：学校の壁を越えた学習

表6 A高等学校の授業におけるICT活用の実態(学年別)

学習場面		学年	A ^{※1} (一斉)					B ^{※2} (個別学習)					C ^{※3} (協働学習)			
			A1	B1	B2	B3	B4	B5	C1	C2	C3	C4				
強	代 替 (S)	1年	10	2	4	1	3	1	0	0	0	0				
	機能的な拡大はなく、従来ツールの代用	2年	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
化	拡 大 (A)	3年	6	0	1	0	1	0	0	0	0	0				
	従来ツールの代用に加え新たな機能付加	1年	3	0	0	0	0	1	0	0	1	0				
変	変 形 (M)	2年	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	実践の再設計を可能にする	3年	3	0	0	0	0	0	1	1	0	0				
換	再定義 (R)	1年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	以前はできなかった新しい実践が可能	2年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
		3年	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2				

※1 A：一斉学習 A1：教員による教材提示

※2 B1：個に応じる学習 B2：調査活動 B3：思考を深める学習 B4：表現・制作 B5：家庭学習

※3 C1：発表や話し合い C2：協働での意見調整 C3：協働制作 C4：学校の壁を越えた学習

となっていることが把握できた。

実習校における今後の家庭科の授業づくりににおいては、前述した世界レベルの調査結果と同様に、「教える道具」としての活用から、「学びの道具（思考と表現の道具）」あるいは「探究と協同の道具」として活用する方途の探索、が課題として見いだせた。

Ⅲ.「深い学び」につながる授業構成理論

1.「深い学び」とは

（1）文部科学省の考え方

文部科学省は「深い学び」について、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を個別の学びとして捉え、それぞれの考え方を整理していた¹⁶⁾。

しかし、この考えからは、「深い学び」を実現するための授業構成論理を読み取ることはできなかったため、佐藤学の理論に着目した。

（2）「深い学び」としてアクティブ・ラーニングが成立する条件

佐藤学は、「深い学び」は、アクティブ・ラーニングにおける学びの質を表現する言葉であるとし、

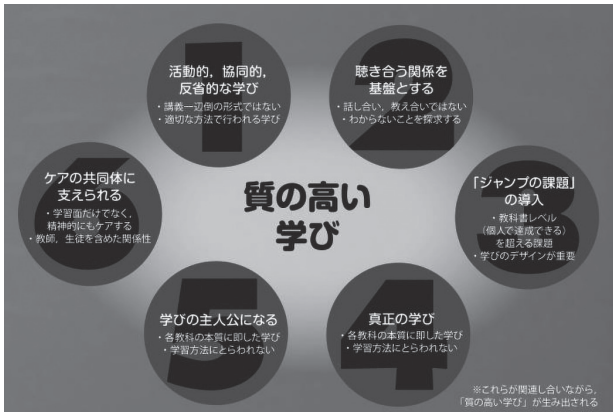


図2 「質の高い学び」を生み出す内実と条件



図3 「深い学び」に必要な「知識」の見方

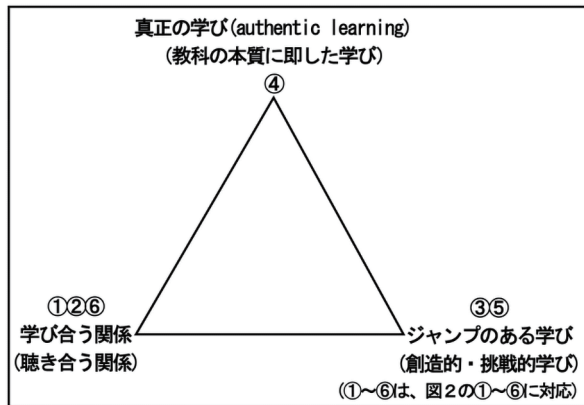


図4 「深い学び」が成立する要件・条件

「質の高い学び」の実現には、図2に示す、①活動的、協同的、反省的な学び、②聴き合う関係を基盤とする、③「ジャンプ課題」の導入、④真正の学び、⑤学びの主人公になる、⑥ケアの共同体に支えられる、の6つの内実と条件が必要であるとしている。さらに、「深い学び」をアクティブ・ラーニングとして成立させるためには、従来の学習で知識は所与のもの、固定したものとして認識されている知識観を、学びによって創造し再構成されるものとして認識しなおさなければならないとしている（図3参照）¹⁷⁾。

これらを「質の高い学び」を生み出す内実と条件の前提となる「学びが成立する要件」を枠組みとして整理すると、「深い学び」をアクティブ・ラーニングとして成立させるためには、図4に示すように、「教科

の本質に即した真正の学び」、「学び合う関係」、「創造的・挑戦的なジャンプのある学び」の3要件¹⁸⁾とそれに対応すると考えられる図2の①～⑥の6つの内実と条件を満たした授業構成をする必要がある、と捉えられた。

2. 家庭科における「真正の学び」

次に、佐藤学の「学びが成立する要件」に挙げられている「真正の学び」は、「深い学び」を意味し、各教科で独自であることから、家庭科における「真正の学び」を検討した。

佐藤学は、真正の学びとは、「教科の本質に即した学び（文学には文学らしい学びがあり、数学には数学らしい学びがある。）¹⁹⁾」と説明している。シュワブは、教科の基盤となる学問の「『構文的構造』がその学問の本質的な特徴を表現している」とし、それを具現化する知識を生み出すための「探究学習」を提唱している²⁰⁾。

この理論に基づき、佐藤園は家庭科の構文的構造について、「家政学では『（家庭）生活』を、『生活の主体者である人間（児童・生徒）と生活するために必要な環境（人・狭義の環境・物）との相互作用によって営まれる』と定義し、そこに家政学の構文的構造が存在している」としている。家庭科における真正の学びについては、「生活の主体者である児童生徒自身が『自分と環境との関係』を、教科内容として編成された『家政学の各研究分野で解明された法則・理論の系統的学習』を通して探究し、より質の高い自身の『生活の見方・考え方』を創造すること」としている（図5参照）²¹⁾。

3. 「深い学び」を目指すICTを活用した学習指導案

以上から、本研究で使用する授業計画案として、探究学習で用いられる教授書の形式²²⁾に加え、ICTを活用した授業に関する先行研究を検討し^{23) 24)}、教授書の形式にICTの活用を位置付けた学習指導案の形式（資料1参照）を開発し、用いることとした。

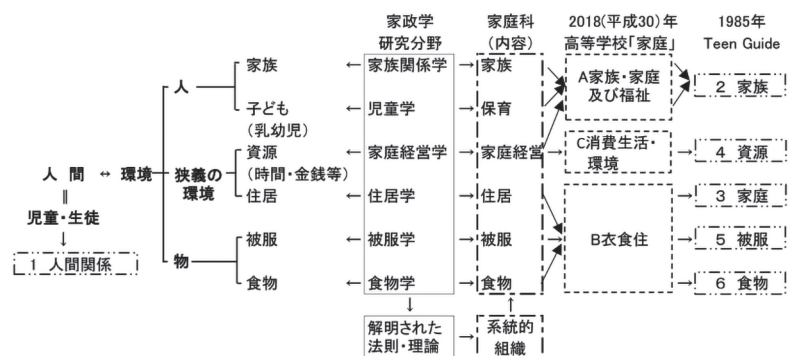


図5 家政学における「(家庭)生活」の営みの定義と家庭科の内容編成

IV. 家庭科授業「なぜ、金銭を計画的に使う必要があるのか」の開発と実践

1. 仮説としての学習指導案「なぜ、金銭を計画的に使う必要があるのか」・教授資料

課題解決実習では、A高等学校の家庭科担当教員から、家庭経営領域の「家計のマネジメント」を50分×2の授業時間で実践するよう割り当てられた。そのため、学習指導要領解説²⁵⁾、教科書²⁶⁾、教科書に準拠した家庭科ノート²⁷⁾の該当部分の記述内容を分析した。その検討結果から、資料1に示す仮説としての学習指導案・教授資料を作成した。

2. 授業の実践と結果の検討

(1) 授業対象者・実施年月日

表7 授業対象者・実施年月日

実施年月日	組	人数
令和4年9月7日(水)	5	男子22名 女子16名
令和4年9月8日(木)	3	男子11名 女子21名
令和4年9月9日(金)	1	男子11名 女子28名
令和4年9月12日(月)	2	男子10名 女子26名
令和4年9月14日(水)	4	男子24名 女子12名

資料1の指導案・教授資料に基づき、小単元名「なぜ、金銭を計画的に使う必要があるのか」の第一次「収入と支出とは何か」の50分×2の授業を、A高等学校2年の生徒を対象に、令和4年9月7日から14

日に長谷川が実施した(表7参照)。

(2) 授業の分析方法

授業分析の視点として、研究の目的から、以下の3点を設定した。

視点1：高等学校「家庭」における「深い学び」とそれが成立する要件・条件

視点2：「深い学び」に組み込む効果的なICT活用

視点3：生徒のICT活用の実態

2時間の授業実践は、VTRで録画し、授業記録を作成した。授業研究の実証性を確保するため、記録として文字化できた授業内容を分析視点から検討した²⁸⁾。授業記録として文字化できないICT活用やグループ活動に関しては、生徒が記述したワークシート、授業評価シート、ICT有用性調査の分析を行った。

(3) 授業の構成と展開

1) 授業のテーマと到達目標

授業のテーマ(標題)と目標を設定するに際して、家庭科における「金銭」

学習について、検討した。

①家庭科における「金銭」学習の位置づけ

図5に示すように、家庭科の家庭経営領域は、人間が生活を営むために必要な環境の3側面のうち「狭義の環境」の中の「資源」との関わり、「学習者⇔資源」の探究を目的とする。「金銭」は、代表的な「資源」の一つとして位置づけられる。

家庭科の基礎学問である家政学の家庭経営学分野では、「資源とは、目標を達成するために使用できるもの」として定義される。そのため、家庭科の家庭経営領域では、自分自身の長期・短期の目標を明確にし、それをどのような資源を用いて達成していくのか、を考えることが必要不可欠な内容となる。

これを前提として、図5に示す2種類の家庭科教科書－“Teen Guide”(以下、T. G.と記す)と「家庭総合」－から、家庭経営学習の内容を検討した。

T. G.は、米国の家庭科教育学者V. M. Chamberlainが中心となって開発した科学主義の理論で編成された第7～9学年の家庭科教科書である²⁹⁾。

図5に示すように、T. G.は家政学の「(家庭)生活の営み」の原理に基づく6つの単元で編成されている。家庭経営学習は、単元4「資源」として位置づけられ、表8³⁰⁾に示す11の小単元と36の学習項目で編成されている。その内容を検討すると、小単元1では、家庭経営学習の目的「自分⇔資源」、小単元2～10では、その目的を達成するための「方法原理」、小単元11では資源管理関係の「職業」、が編成され、学習者が問題解決のプロセスを経て家庭経営学習の目的である「自分⇔資源」を探究できるようになっていた。

具体的には、小単元1で「自分の人生の目標設定」、小単元2では、その目標を達成するために必要な

表8 T. G.単元4「資源」の内容編成

小単元	学習項目
1. 目標設定	(1)短期目標 (2)長期目標
2. 日常生活における(意思)決定	(1)意思決定スタイル (2)問題解決の段階(手順) (3)問題解決に関する問題: ①問題に直面することを拒否する ②恐いもの知らず ③思考停止 ④忠告
3. 資源とは何か	(1)あなた (2)あなたの家族 (3)あなたの学校 (4)あなたのコミュニティ (5)時間 (6)金銭 (7)資源の管理
4. 誰に時間がある?	(1)あなたの時間管理 (2)他の人の時間を大切に (3)時間の無駄遣い (4)開始と終了
5. 学校と地域社会	
6. お金の通路	(1)計画さえ立てれば簡単だ (2)賢く使い...賢く貯める! (3)自分に合った支出計画を立てる
7. あなたの消費者としての購買力	①いろいろなものが「買ってくれ!」と言う ②ステータスシンボル ③広告 ④目を引くディスプレイ (1)スーパーセールとバーゲン (2)消費者保護 ①消費者保護法 ②保証 ③あなたの苦情は聞き入れられるのか?
8. 今すぐ支払うか、後で支払うか	(1)信用収縮: ①クレジットカード ②割払いプラン ③ローン (2)あなたはクレジットを評価するか?
9. 天然資源	(1)生存のための資源 (2)再生可能資源: ①水という特別な資源 (3)再生不能資源: ①エネルギー戦略: エネルギー源 ②あなたは省エネに貢献できる
10. 資源としてのコンピュータ	(1)コンピュータとは何か? (2)あなたの世界のコンピュータ: ①家電製品のコンピュータ ②家庭用マイコン ③家庭外のコンピュータ (3)マイコンの仕組み: ①入力 ②処理 ③ストレージ(保存) ④出力 (4)コンピュータ使用 (5)家庭用コンピュータの購入
11. 資源管理の仕事	(1)キャリア・クイズ: あなたは地域社会に特に関心がありますか? ①コミュニティ・キャリア: エントリー・レベル ②コミュニティ・キャリア: 職業訓練または専門職訓練が必要 ③コミュニティでのキャリア: 専門職学位を伴う大学教育 (2)キャリア・クイズ: あなたは消費者であることを楽しめませんか? ①消費者関連職: エントリー・レベル ②コンシューマー・キャリア: 職業訓練またはパラプロフェッショナルトレーニングが必要 ③消費者関連職: 専門職学位を伴う大学教育 (3)キャリア・クイズ: あなたは消費者であることを楽しめませんか? ①消費者関連職: エントリー・レベル ②消費者関連職: 職業訓練またはパラプロフェッショナルトレーニングが必要 ③コミュニティでのキャリア: 専門職学位を伴う大学教育 (4)キャリア・クイズ: あなたは数字を扱う仕事が好きですか? ①マネー・キャリア: エントリー・レベル ②マネー・キャリア: 職業訓練または専門職訓練が必要 ③マネー・キャリア: 専門職学位を伴う大学教育 (5)キャリアクイズ: あなたは環境問題に関心がありますか? ①環境関連職: エントリー・レベル ②環境関連職: 職業訓練または専門職訓練が必要 ③環境関連職: 専門職学位を伴う大学教育

「日々の意思決定」、小単元3では、意思決定に基づき問題解決に使用できる「資源とは何か」、小単元4～10では、代表的な資源として、人的・物的資源としての「時間」「学校・地域社会」、物的資源としての「金銭」「天然資源」「コンピュータ」に加え、T. G.が中等学校教育段階の家庭科であるため、最後の小単元11では、学習内容から発展した資源管理関係の「職業」、に関する内容が設定されていた。

表9 「家庭総合」の内容編成

A 人の一生と家族・家庭及び福祉
(1) 生涯の生活設計
(2) 青年期の自立と家族・家庭及び社会
(3) 子供との関わりと保育・福祉
(4) 高齢者との関わりと福祉
(5) 共生社会と福祉
B 衣食住の生活の科学と文化
(1) 食生活の科学と文化
(2) 衣生活の科学と文化
(3) 住生活の科学と文化
C 持続可能な消費生活・環境
(1) 生活における経済の計画
(2) 消費行動と意思決定
(3) 持続可能なライフスタイルと環境
D ホームプロジェクトと 学校家庭クラブ活動

それに対して、わが国の高等学校普通科目の「家庭」は、図5に示すように、科学主義ではなく、生活上の課題に基づくABCDの4つの内容で編成されている。実習校で学習している普通科目「家庭総合」の内容編成（表9³¹⁾）を検討すると、家庭経営に該当する内容は、T. G.のように系統的には組織されてお

らず、Aの（1）とCで、「ライフステージの特徴と課題」を理解し、生活の営みに必要な「金銭」と「生活時間」を理解する学習となっていた。そのため、「自分自身の長期・短期目標」は、内容としては扱われず、「学習者⇄資源」の視点も欠落していた。

②授業のテーマと到達目標

以上の検討結果から、授業のテーマとしては、家庭科の真正の学びに不可欠な「学習者⇄金銭」を探究させるため、「なぜ、金銭を計画的に使う必要があるのか」を設定し、標題とした。

次に、その問いに答えるための手段として、学習指導要領解説と教科書の記述から知識を抽出し分析した結果から、小単元の指導計画と到達目標を設定した。「収入と支出とは何か」、「家計のマネジメントとは何か」の2つの内容を、指導計画の第一次、第二次とし、第一次では、到達目標①「収支のバランスを考えて計画的に金銭を管理することは、より良い生活を実現し、夢や目標を達成するために大切である。」、第二次では、到達目標②「事故や病気、失業等のリスクに対応するためには、生涯を見通した計画的な金銭管理が必要である。」、③「人生を通して必要となる費用は、ライフステージごとに異なるため、生涯を見通した経済計画を立てることが重要である。」という知識を生徒に創らせることとした。

2) 授業前

A高等学校では、令和4年度の入学生から個人で

ノートパソコンを購入させているが、2・3年生では学校側が一台ずつ貸与して授業を行っている。

そのため、授業前には、生徒用会議室にきた生徒にPCを渡し、各自のログインIDを入力し、PCを立ち上げるよう指導した。しかし、全クラスにおいて、授業開始時間になっても、ログインIDを忘れてしまった生徒と故障したPCへの教師の対応が必要であった。

3) 導入部

最初に、生徒が授業中に記入する「ワークシート」（教授資料①）と授業で用いる「資料①～④」（教授資料②）を配布した。

次に、教授資料①「今日の課題」と教授資料②「資料①②」をPower Pointで提示（表4 “A1×S”に該当）し、「授業の課題」を確認した。

「授業の課題」は、「ジャンプ課題」として、生徒自身が主人公となり、自分の夢の実現のための目標を達成するための資源としての金銭の管理（家計管理）を探究できるように、生徒と同じ高校2年生のはるなさんの夢であるキャンピングアテンダントとその実現のための短期目標となる「英会話教室に通うための月謝」を捻出することができるかを、はるなさんのお小遣いと家族の家計から検討する、という内容とした。その検討のために必要な教授資料②（資料①～⑤）は、生徒の実態に即した内容となるよう、総務省が実施した家計調査、労働力調査、国勢調査や、スタディサプリが実施したお小遣い実態調査を踏まえ、家族構成や年齢、雇用形態、小遣いの金額や使用用途を検討し、作成した。

4) 展開部

①展開1

展開1では、「ジャンプ課題を検討するためにはどのような情報を知る必要があるのか」と問い、「はるなさんの家族の家計（収入と支出）を知る必要がある」ことを確認した上で、教授資料②「資料③ はるなさんの家族の収入と支出」をPower Pointで提示（表4 “A1×S”に該当）し、生徒にはるなさんの家族の収入と支出の内容と金額を把握させた。

次に「収入と支出」の分析をするために必要な内容について確認した。具体的には、教科書の「収入と支出の構成」に関する記述と教授資料②「資料④ ⑤ はるなさんの両親の給料明細」をPower Pointで提示（表4 “A1×S”に該当）し、収入と支出の構成とそれらの意味を確認した上で、その知識を用いて、生徒は「家庭科ノート」の問題に解答した。

②展開2

展開2では、教授資料⑤「はるなさん家族の家計の分類を行うGoogle Spread Sheet (GSS)」を

Google classroomから配信し、生徒にそれを開くよう指示した。これは、生徒がChromebookとGSSの操作に慣れることを目的として作成し、組み込んだ活動である。

具体的には、展開①で確認した知識を応用し、生徒が個別に、教授資料⑤を用いて収入と支出の分類（表4 “B1×S” に該当）を行う。収入と支出の分類は、教授資料⑤「はるなさん家族の家計」の品目（D列）と金額（E列）を確認し、収入と支出の構成（ABC列）の各項目のプルダウンリストから当てはまるものを選択することで行った。その後、教授資料⑥「はるなさん家族の家計の分類を行うGSSの解答」を配布し、各自で完成させた教授資料⑤と教授資料⑥を照らし合わせて、間違いがないか確認した。

次に、教授資料⑤のGSS上に添付している「はるなさん家族の家計の計算結果」を確認し、はるなさん家族の実収入と実収入以外の受取、実支出と実支出以外の支払い、消費支出と非消費支出の金額を把握する。今回は、生徒のICT活用の実態と授業時間を考慮し、生徒自身が計算して金額を算出するのではなく、生徒が教授資料⑤のABC列を完成させると自動的に金額の計算結果が出るようにGSSを作成し、結果をすぐに確認できるようにした。

しかし、実際には、活動以前のChromebookを立ち上げ、Google classroomを開き、その最新の投稿から、教授資料⑤を開くことができない生徒が複数おり、この対処に時間がかかってしまった。例えば、5クラス中、最後に授業実践を行った2年4組では、実践者（長谷川）と補助の先生2名で机間個別指導を行い、最終的には、生徒全員（36名）が開けているか確認するために5分の時間を費やした。

③展開3

展開3では、展開1・2を応用し、「ジャンプ課題」の検討―「英会話教室に通うための月謝の捻出は可能か」と「その判断理由」―を、生徒が自身の考えを協同的な学びの中で創出していけるように、i 生徒個人→ii グループ→iii クラス全体→iv 生徒個人、の順に行った。

i 生徒個人の検討

生徒は、まず、個人で「ジャンプ課題」を検討し、その検討結果をワークシート（教授資料①）の「①はるなさんはお小遣いを増やしてもらうことは可能か、あてはまる方を○でかこみましょう。そのように判断した理由も書きましょう。」に記入した。

ii グループでの検討

iの結果をグループで検討し、その結果を、共有機能をかけたGoogleスライドにまとめ（表4 “C2

×A” に該当）、ワークシートの②に記入した。

グループ編成に関しては、佐藤学が「多様な個性や能力の子どもが偶発的に組織されるのが好ましい」という理由から「グループは男女4人編成で、クジで決めることがベスト」³²⁾と述べている。しかし、表7に示すように、授業を実施したクラスでは、男女比が異なっており、男女4人編成にすることが難しかったため、座席順で1グループ4～5名の編成とした。

iii クラス全体での検討

iiで作成したGoogleスライドを用いて、グループの代表者が検討結果を報告し（表4 “C1×S” に該当）、実践者（長谷川）が各グループの要点を黒板にまとめ、クラス全体で質問や意見交換を行い、その結果をワークシートの③に記入した。

2年4組では、2つのグループは「そもそも収入と支出の差額が300円しかないため、小遣いの増額はできない」と結論づけたが、他の6グループでは、家計の削れる部分として、家族全体に関わる消費支出の食料、家事・家事用品、交通・通信と、実支出以外の支払いである両親の預貯金に着目し、「増額ができる」という結論を出していた。そこで、実践者（長谷川）も討論に加わり、「はるなさん（自分自身）の夢の実現のために、はるなさん自身に関する家計の中で、将来支出するのか、それとも現在支出するのか、を考えることはできないか？」と意見を言うと、生徒から「はるなさんの大学費用の貯金を削り、小遣いを増額して英会話教室の月謝を支払い、大学生になってアルバイト等をして大学費用の不足分を支払う」という新たな視点が見出された。

iv 生徒個人での結論の創出

i→ii→iiiの検討を踏まえ、生徒が各自の最終的なジャンプ課題に対する結論を、ワークシートの④に記入した。

5) 終結部

終結では、教授資料⑦をPower Pointで提示（表4 “A1×S” に該当）しながら「授業の振り返り」を行った後、生徒は、ワークシートの⑤「なぜ、収入と支出の構成について知る必要があるのか」、⑥「なぜ、収入と支出について考える必要があるのか」に対する自身の考えを記入した。

最後に、「授業評価」と「ICT活用有用性調査」にGoogle Formsで回答した。授業終了時間までに回答が終えられなかった生徒には、締め切り日時を告げ、授業を終了した。

(4) 授業におけるICT活用

①授業に組み込んだICT活用のレベル

(3) - 4) で述べたように、授業には“Power

Pointを用いた説明（A1×S）”，“GSSによる収支の分類と計算（B1×S）”，“Googleスライドを使用したグループでの検討結果の発表（C1×S）”，“Googleスライドの共有機能を用いたグループ検討の結果の共有（C2×A）”の4種類の活用方法を組み込んだ。

②ICT活用に関する生徒の評価

授業におけるICT活用に対する生徒の評価を考察するために、中西らの開発した「中学校理科におけるICT活用の有用性調査」³³⁾の質問の一部を家庭科用に変更した「ICT活用有用性調査」を作成した。調査項目は、大問Ⅰ～Ⅳの5件法による全21問（表10参照）である。

提出期限（9月16日）までに届いた155件の回答（5組25件，3組22件，1組36件，2組37件，4組35件）の各質問項目の得点を集計し、その平均得点を求めた。結果は、表10に示す通りである。

質問項目3-1「ICTを使うことで、自分で考える力が身に付くと思うか」の得点のみが3.94であり、それ以外の質問項目の得点は4点以上となっていた。この結果から、生徒は、「ICTを使うことで、効率よく、積極的に協同的な学びに取り組むことができる」と、学習におけるICT活用を積極的に評価していると考えられた。

③Chromebookの操作に対する生徒の評価

本授業で試みたChromebookの操作に関する評価は、「授業評価シート」で行った。

「授業評価シート」は、大野らが、ストレスマネジメント教育に用いるために作成した授業評価シート³⁴⁾を、本研究の授業実践に対応するよう一部変更した大問Ⅰ「今日の授業について」、大問Ⅱ「今日の授業のChromebookの使用について」、大問Ⅲ「今日の授業の良かったところ、悪かったところ」から構成している。

大問Ⅱは、今日の授業のChromebookの使用について、(1)「①とてもできた、②すこしできた、③どちらともいえない、④あまりできなかった、⑤まったくできなかった」の中から該当するものを1つ選んでマークし、④⑤を選択した場合、(2)「できなかった操作や難しいと感じたところを具体的に記述して下さい」にスキップし、自由記述をするようになっている。

(1)の5件法で回答を求めた「Chromebookの操作が適切にできたか」に関しては、回答の①5点，②4点，③3点，④2点，⑤1点として計算し、各クラスの平均点を求めた。

表10 授業後のICT活用有用性調査の結果

質問項目		得点
大問Ⅰ 学習の効率化 に関する質問	1-1 ICTを使うことで、授業で学んだ内容が理解しやすくなると思いますか。	4.38
	1-2 ICTを使うと、授業で学んだ内容を振り返りやすいと思いますか。	4.33
	1-3 ICTを使うと、実習の記録や実験の結果をまとめやすいと思いますか。	4.52
	1-4 ICTを使うと、実習・実験の様子や記録を残せるので勉強に役立つと思いますか。	4.55
	1-5 ICTは、詳しいことまで調べられるので勉強に役立つと思いますか。	4.71
	1-6 ICTを使うと、実験結果を比較することができるので勉強に役立つと思いますか。	4.51
大問Ⅱ 学びへの積極性 に関する質問	2-1 ICTを使うことで、楽しく授業を受けることができると思いますか。	4.54
	2-2 ICTを使うことで、授業での学習を「これなら自分でできそうだ」と思いますか。	4.26
	2-3 ICTを使うことで、授業で学習したことをもっと調べてみたいと思いますか。	4.21
	2-4 ICTを使うことで、授業に集中して取り組めると思いますか。	4.13
	2-5 ICTを使うことで、分からないことを自分で調べる力が身に付くと思いますか。	4.57
大問Ⅲ 思考の深化 に関する質問	3-1 ICTを使うことで、自分で考える力が身に付くと思いますか。	3.96
	3-2 ICTを使うことで、結果から考察する力が身に付くと思いますか。	4.08
	3-3 ICTを使うことで、自分の考えを深めることができますと思いますか。	4.21
	3-4 ICTを使うことで、授業で学習した内容を正しく説明できると思いますか。	4.17
	3-5 ICTを使うことで、実験結果などを比較する力が身に付くと思いますか。	4.38
大問Ⅳ 他者との比較・共有 に関する質問	4-1 ICTを使うと、みんなと実験の結果や実習の記録を共有できると思いますか。	4.71
	4-2 ICTを使うと、みんなと意見や考えを共有できると思いますか。	4.63
	4-3 ICTを使うことで、互いに協力して学習できると思いますか。	4.47
	4-4 ICTを使うと、他の人の考え方や整理の仕方が学べると思いますか。	4.53
	4-5 ICTを使うことで、自分の考えや意見をわかりやすく伝えることができると思いますか。	4.43
	4-6 ICTを使うことで、自分の考えとみんなの意見を比較する力が身に付くと思いますか。	4.44

提出期限（9月16日）までに届いた175件の回答（5組38件，3組26件，1組37件，2組36件，4組38件）の大問Ⅱの評価結果は、1クラスの平均点が3.95であったが、他のクラスでは4点以上となっており、生徒の多くは「問題なく適切にChromebookを操作することができた」と評価していた。しかし、操作ができなかった生徒に求めた(2)の回答からは、Chromebook自体の操作の問題よりも、「パスワードが分からなかったので開けず、使えなかった」等の問題が見られた。

(5) 協同的な学びによる生徒の知識創出

「深い学び」の成立に結びつく「協同的な学びによる知識の創出」に関しては、授業中に生徒が記述した「ワークシート」の分析により検討した。「ワークシート」は、授業終了後すぐに回収し、5組38人，3組32人，1組39人，2組36人，4組36人の合計181人分を対象とした。

①協同的な学びによる知識の創出

ジャンプ課題を、i個人→iiグループ→iiiクラス→iv個人、の順で検討し、その結果を記述したワークシートの「①(i個人での検討結果の記述)」と「④(iiグループ→iiiクラスの検討を経て、iv最終的に個人で検討した結果の記述)」を比較し、協同的な

表11 ジャンプ課題に対する個人の結論

	5組 (38人)	3組 (32人)	1組 (39人)	2組 (36人)	4組 (36人)	全体 (181人)
変化あり	21	14	24	13	24	96
変化はないが協同的な学びの影響あり	14	10	13	15	5	57
変化なし	2	4	2	4	2	14
評価不能	1	4	0	4	6	15

学びにより自分の結論・考えを創ることができたのか、を分析した。結果は表11に示す通りである。

クラス別では、5組35人、3組24人、1組39人、2組28人、4組29人、全体では96人(84%)の生徒が、グループとクラス全体での検討を経て、最終的な自分の結論を記述していた。

②「自分⇄家計(金銭)」に関する知識の創出

本時の授業の到達目標として設定し、家庭科家庭経営学習の「深い学び」に不可欠な「自分⇄家計(金銭)」に関する知識の創出に関しては、ワークシート⑤「なぜ、収入と支出の構成について知る必要があると思うか」、⑥「なぜ、収入と支出について考える必要があると思うか」の記述内容を分析した。

分析は、⑤⑥に対して表12に示すABCの評価基準を設定し、記述内容を基準と照合し、3段階で評価した。結果は表13に示す通りである。

⑤に関しては、5組29人、3組20人、1組33人、2組21人、4組25人、全体では128人(71%)の生徒が、A(十分に満足である)かB(満足である)の評価となり、収入と支出を知らなければならない理由について説明できていた。

⑥に関しては、5組34人、3組23人、1組35人、2組33人、4組31人、全体では156人(86%)の

生徒が、AかB評価となり、「自分と家計(金銭)の関係」に関する記述ができていた。

(6) 生徒の授業に対する評価

生徒の授業に対する評価を、「授業評価シート」大問Ⅰと大問Ⅲの分析から検討した。

大問Ⅰは、今日の授業に関して「(1)興味を持てたか」「(2)自分の生活に関係があるか」「(3)今日の授業で覚えたことを、日常生活で活用する自信があるか」「(4)今日の授業の内容は、理解できたか」の4項目を、「①全くない」から「⑥とてもある」の6件法で問い、①～⑥の中で該当するものを1つマークさせ、①1点、②2点、③3点、④4点、⑤5点、⑥6点として各得点を集計し、クラス毎の平均得点を算出した。

大問Ⅲは、今日の授業で「(1)良かったところ」と「(2)悪かったところ」を自由に記述させ、KH Codaを活用し、分析を行った。

提出期限(9月16日)までに届いた175件の回答の大問Ⅰのクラス別の評価結果は表14、大問Ⅲの「良かったところ」「悪かったところ」についての共起ネットワーク図は図6と図7に示す通りである。

表14からわかるように、(1)～(4)の全項目において高い平均点となっていた。この結果から、生徒は、今日の授業の「内容は自分の生活にとっても関係があり」「興味を持って取り組み」「内容をとても理解でき」「授業で覚えたことを、日常生活で活用できる自信がある」と評価していると捉えられた。

「授業の良かったところ」についての共起ネットワーク図6では、「01 実践者の支援」「02 グループでの検討」「03 収入と支出の理解」「04 実践者(長谷川)の声」「05 端末の活用」「06 授業スライド」「07 授業の進行」に関する7つのサブグラフが示された。図の右側に示された円の大きさと抽出語の出現頻度の目安」からみると、出現頻度の多い抽出語を含む

02, 03, 05のグループから、生徒は「具体的な事例の説明を通して収入と支出についてよく分かり」、「たくさんさんの資料を用いて、班で話し合うことが楽しく」、「Chromebookを活用した授業は新鮮」だったと評価していると考えられた。

「授業の悪かったところ」についての共起ネットワーク図7では、「01 試行時間」「02 端末の操作」「03 机のスペース」「04 資料」「05 授業の進度」に関する5つのサブ

表12 ワークシート⑤⑥の記述に対する評価基準

評価方法	問い・記述内容	⑤なぜ、収入と支出の構成について知る必要があるのか	⑥なぜ、収入と支出について考える必要があるのか
		ワークシート⑤の記述内容	ワークシート⑥の記述内容
評価基準	A(十分に満足)	なぜ家計の構成について知る必要があるのか、授業で取り上げた以上のことを考察して説明できている。	なぜ収入と支出について考える必要があるのか、収入と支出のバランスの重要性に触れなるとともに、授業で取り上げた以上のことを考察して説明できている。
	A評価の記述の例	それぞれの意味が分からないと、家計の管理ができず、家計の改善のために考えることができないから。	収入と支出をバランスよくすることで、夢や目標の実現、自己実現、幸福の追求に金銭を使うことができるから。
	B(満足)	なぜ家計の構成について知る必要があるのか、学習したことを踏まえ、説明できている。	なぜ収入と支出について考える必要があるのか、収入と支出のバランスの重要性に触れながら説明できている。
	B評価の記述の例	それぞれの意味が分からないから、家計の管理ができないから。のどちらかが記述されている。	バランスの良い使い方ができたり、節約できたり、トラブルを回避したり、貯金にまわしたりできるから。
	C(努力を要する)	なぜ家計の構成について知る必要があるのか、説明できていない。	なぜ収入と支出について考える必要があるのか、説明できていない。
	C評価の記述の例	将来に使うから、もうすぐ成人になるからなど空欄で提出している	今後に活かせるから、親に感謝できるから、お金の大切さを感じられるからなど空欄で提出している

表13 ワークシート⑤⑥の記述に対する評価結果

	⑤なぜ、収入と支出の構成について知る必要があるのか			⑥なぜ、収入と支出について考える必要があるのか		
	A(十分に満足)	B(満足)	C(努力を要する)	A(十分に満足)	B(満足)	C(努力を要する)
5組(38人)	10	19	9	9	25	4
3組(32人)	1	19	12	3	20	9
1組(39人)	8	25	6	6	29	4
2組(36人)	3	19	14	4	29	3
4組(36人)	12	13	11	1	30	5
全体(181人)	34	95	52	23	133	25

表14 授業に対する評価結果

	(1) 授業に興味をもてた	(2) 自分の生活に関係がある	(3) 日常生活で活用する自信がある	(4) 授業の内容を理解できた
5組(38件)	5.06	5.37	4.55	4.97
3組(26件)	5.15	5.31	5.23	5.50
1組(37件)	5.27	5.46	5.03	5.54
2組(36件)	5.17	5.39	4.83	5.53
4組(38件)	5.16	5.37	4.61	5.37

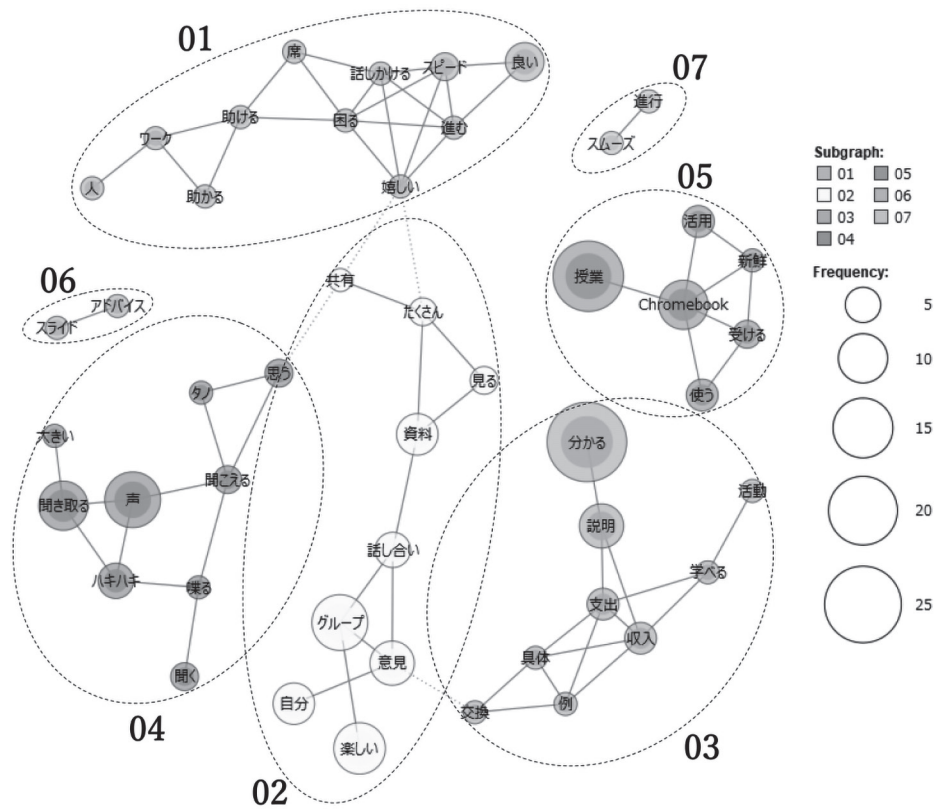


図6 「良かったところ」の共起ネットワーク図

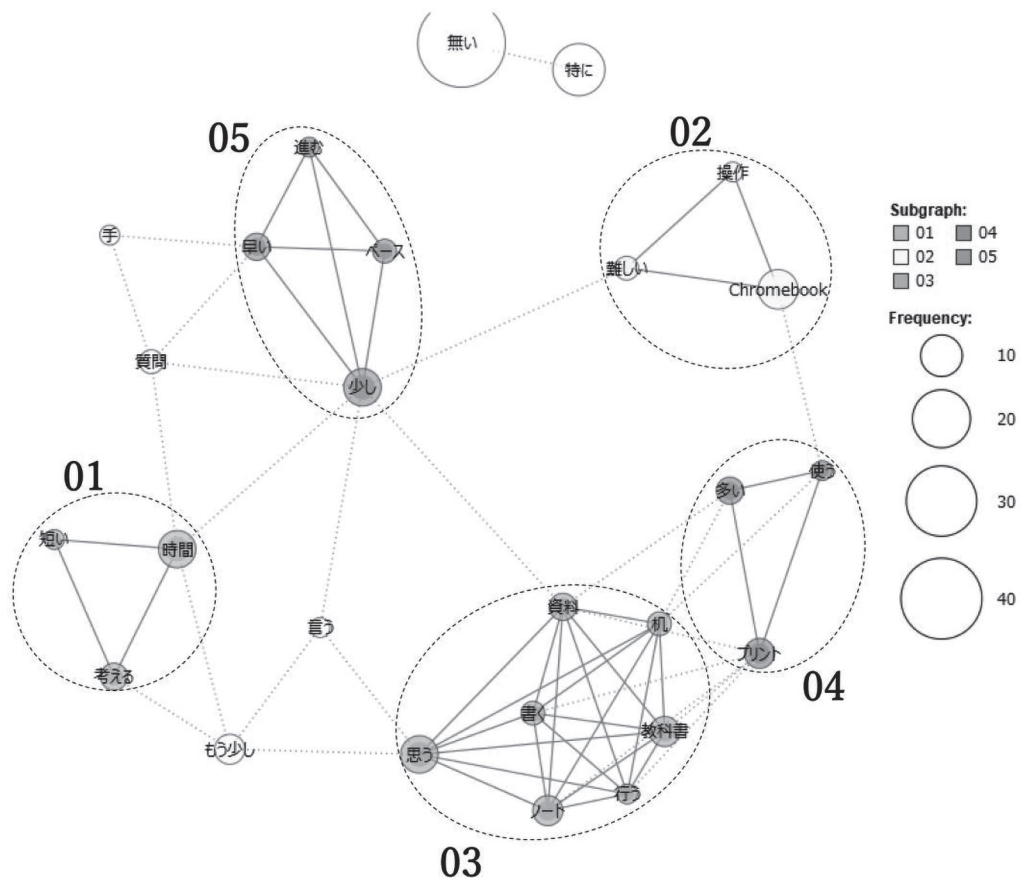


図7 「悪かったところ」の共起ネットワーク図

グラフが示された。01から05のいずれのグループの用語も出現頻度は低いが、「授業の進度が速く」「思考時間が短い」、「使用する資料等や書くことが多いのに、机のスペースが狭く作業がしにくい」、「Chromebookの操作が難しい」点に改善を求めている生徒がいることも明らかになった。

V. おわりにー授業の評価と課題ー

1. 高等学校「家庭」における「深い学び」とそれが成立する条件

本実践では、授業テーマを「生徒自身と金銭との関わり」を探究できる「なぜ、金銭を計画的に使う必要があるのか」に設定し、生徒と同学年の「はるなさんの夢の実現のための習い事の費用を支払うことができるかを、家計から検討する」ジャンプ課題に、個人→グループ→クラス→個人の順に取り組んだ結果、84%の生徒が協同的な学びを通して自分自身の結論（考え）を出し、テーマの問い「なぜ、収入と支出の構成について知る必要があるのか」に対して71%の生徒が、「なぜ、収入と支出について考える必要があるのか」に対して86%の生徒が、「自分と金銭との関係」から知識を創り出していた。

さらに、「授業評価シート」大問Ⅰの分析から、生徒は、ジャンプ課題の検討に、自分の生活に関わる課題として興味を持って取り組み、「はるなさんの夢の実現」と「家計の問題」を、「自分自身の目標の実現」と「自分の家族の家計の問題」に結びつけて捉え、自身の生活に活かすことができると本授業を評価していると考えられた。加えて、「授業評価シート」大問Ⅲの分析からも、収入と支出について具体的な事例を通してよく理解でき、たくさんの資料を用いて、グループで話し合うことが楽しく、Chromebookを活用した授業は新鮮だった、と評価していることが把握できた。

以上を、佐藤学が示す図4の「深い学び」が成立する要件・条件から捉え直すと、本実践では、家庭科の「真正の学び」に不可欠な「生徒自身と環境（金銭）との関わり」を探究できる授業テーマ（問い）を設定し、それを「生徒自身が学びの主人公となるジャンプ課題」を、「個人→グループ→クラス→個人」の順に協同的な学びを通して検討し、自身の課題に対する結論を導出することで、「生徒自身と環境（金銭）との関係」を説明する知識を創出することが可能となり、「深い学び」が成立した、と考えることができた。

2. 「深い学び」に組み込む効果的なICT活用

本実践では、表4に示すA1×S, B1×S, C1×S, C2×Aの4つのレベルのICTの活用方法を取り入

れた。それに対して、「授業評価シート」の大問Ⅱ・大問Ⅲと「ICT活用有用性調査」の結果をみると、生徒は、今回の学習材としてのICT活用（B1×S, C1×S, C2×A）では、ICTを適切に操作することができ、さらに、ICTを学習で活用することは新鮮で、効率よく、他者と積極的に協同的な学びに取り組むことができる、と評価していた。

一方で、「授業記録」や「授業評価シート」の大問Ⅱ・Ⅲの結果からは、学習ソフトの操作が難しかった生徒もいたことに加え、ログインIDを忘れたり、Chromebookの故障が原因で、Chromebookにログインできない、等のICT活用以前の問題も生じていた。

以上から、本実践を通して、「深い学び」につながるためのICT活用は、資源の削減や業務の効率化などを目的とした活用ではなく、「生徒がジャンプ課題を検討する際の学習材としての活用」を、個人や協同的な学びに組み込む必要があることが把握できた。しかし、学習材としての活用を行うためには、教師がICTを活用できる環境を整え、ICT器機の整備を行うと共に、生徒のICT活用レベルを事前に検討し、授業の目標・内容の検討から、適切なICT活用を行える学習場面を設計する必要があることが把握できた。

注および引用文献

- 1) 中央教育審議会（2016）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」平成28年12月21日，pp.9～16
- 2) 前掲書1）pp.20～26
- 3) 前掲書1）pp.47～50
- 4) 前掲書1）p.53
- 5) 文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編』東洋館出版社，pp.117～120
- 6) 前掲書5）pp.124～126
- 7) 前掲書5）pp.54～56
- 8) 文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 家庭編』教育図書，pp.3～4
- 9) 前掲書8）p.90
- 10) 文部科学省「（リーフレット）GIGAスクール構想の実現へ」（2024年3月確認）
https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt_syoto01-000003278_1.pdf
- 11) 佐藤学（2021）『第四次産業革命と教育の未来ーポストコロナ時代のICT教育』岩波書店，pp.49

～ 50

- 12) 前掲書11) pp.50～54
- 13) 岡山大学教職大学院カリキュラム（2024年5月確認）
<https://edu.okayama-u.ac.jp/~kyoujissen/curriculum.html>
- 14) 文部科学省「学びのイノベーション事業実証研究報告書」（2024年5月確認）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/030/toushin/1346504.htm
https://www.mext.go.jp/content/1407394_6_1.pdf
- 15) 三井一希（2014）「SAMRモデルを用いた初等教育におけるICT活用実践の分類」『日本教育工学会研究報告集』14(2), pp.37～40
- 16) 前掲書1) pp.49～50
- 17) 佐藤学（2017）「深い学びとしてアクティブ・ラーニングが成立する条件」開隆堂出版株式会社『KGKジャーナル』Vol.52-1, pp.8～9
- 18) 佐藤学（2012）『学校を改革するー学びの共同体の理想と実践』岩波書店, pp.25～34
- 19) 前掲書17)
- 20) 佐藤学（1996）『カリキュラムの批評ー公共性の再構築へー』世織書房, pp.83～94
- 21) 佐藤園（2022）「『真正の学び』としての家庭科の授業づくり」広島大学附属小学校学校教育研究会『学校教育9月号』No.1261, pp.14～21
- 22) 佐藤園（1996）『家庭科授業構成研究』家政教育社, pp.143～304
- 23) 日高純司他（2021）「GIGAスクール構想の実現に向けた校内研修の推進に関する研究」『宮崎大学教育学部紀要』第96号, pp.1～14
- 24) NTTラーニングシステム株式会社教育ICT推進部（2017）「文部科学省委託ICTを活用した教育推進自治体応援事業成果報告書 平成28年度ICTを活用した学びの推進プロジェクト成果取りまとめICT活用実践コース」pp.77～80（2024年3月確認）
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/11/22/1398418_2.pdf
- 25) 前掲書8) pp.74～76
- 26) 牧野カツコ・河野公子他『家庭総合 自立・共生・創造（2・東書・家総307）』東京書籍, pp.104～107
- 27) 『家庭総合学習ノート（教科書準拠）』東京書籍, pp.56～57
- 28) 森分孝治（1999）「社会科教育学研究の類型と方法研究ー学問性の確保」森分孝治編『社会科教育学研究ー方法論的アプローチ入門ー』明治図書, pp.24～25
- 29) V. M. Chamberlain(1984). TEEN GUIDE, McGraw-Hill.
- 30) 前掲書29) pp.198～265より作成
- 31) 前掲書8) pp.51～83より作成
- 32) 前掲書18) pp.34～35
- 33) 中西一雄他（2021）「中学校理科授業における生徒のICT活用の有用性認識尺度の開発」『日本教育工学論文誌』45（2）, pp.173～183
- 34) 大野太郎他（2007）『ストレスマネジメント・テキスト』東山書房, pp.39～40

資料 1

学習指導案「なぜ、金銭を計画的に使う必要があるのか」

1. 小単元名 「なぜ、金銭を計画的に使う必要があるのか」

2. 小単元の到達目標（概念的・説明的知識）

- ①収支のバランスを考えて計画的にお金を管理することは、より良い生活を実現したり、夢や目標を達成したりするために大切である。
- ②生涯を見通して計画的にお金を管理しないと、事故や病気、失業などへのリスクに対応することができなくなってしまう。
- ③人生を通して必要となる費用は、ライフステージごとに異なるため、生涯を見通して経済計画を立てることが重要である。

3. 小単元の指導計画

第一次 「収入と支出とは何か」 2時間（本時）

第二次 「家計のマネジメントとは何か」 2時間

4. 小単元の展開（第一次のみ）

パート	主な時間	教授・学習活動 (教員・教、 生徒・生)	教授 資料	到達目標() 内は、予想される生徒の答え)	ICT 活用			
					誰が	何のために	何を	どう 使うか
導入 5分	◎課題の提示と説明	教：説明する	①②		教員	理解を深めるため	ス ラ イ ド (PowerPoint)	提示する
はるなさん(高校2年生)は、45歳の正規雇用(正社員)の父と、45歳の非正規雇用(契約社員)の母、中学3年生(15歳)の弟の4人家族です。はるなさんのなりたい職業はキャビンアテンダントで、その夢を叶えるために英語教室に通いたいと考えています。はるなさんは毎月5500円のお小遣いをもらっていますが、今のお小遣いの金額では、英語教室の月謝10000円を払うことができません(教授資料②「資料①」)。 そこで、はるなさんはお小遣いの使い方の見直しと、自分で収入を得る方法を考えました(教授資料②「資料②」)。見直しについては、レンタルDVDや図書館の利用によって、毎月の支出をおさえることができそうということが分かりました。自分で収入を得る方法については、アルバイトをしようと思いましたが、高校の規則で禁止されているためできませんでした。今のままではお小遣いから月謝を支払うには、あと7300円足りません。 次に、はるなさんは、月々12300円のお小遣いをもらうことは可能か検討することにしました。はるなさんはお小遣いを7300円増やしてもらうことは可能でしょうか。はるなさんの立場になって、みなさんと課題を検討してみましょう。								
	◎本時の目標	教：説明する						
課題を検討し、はるなさんへのアドバイスを考えよう。								
展開① 15分	◎収入と支出に関する知識の獲得	教：説明する		・検討するためには、はるなさんの家族の家計を把握する必要がある。 ○家計は、主として、収入と支出の観点から、家庭の経済行為を捉えたものである。				
	○はるなさん家族の収入と支出を見なさい。	教：指示する 生：教授資料②資料③を見る	②					
	○収入とは何か。	教：説明する	③	○収入は、資産を実質的に増やす実収入と、実質的には増やさない実収入以外との受取に分けられる。 ○実収入は、定期的に入る経常収入と定期的ではない一時的な収入に分けられる。 ・経常収入のその他には、年金があげられる。 ・特別収入の受贈金には、具体的に各種お祝い、見舞金、退職金などがあてはまる。	教員	理解を深めるため 分かりやすくするため	ス ラ イ ド (PowerPoint)	提示する
	○はるなさんの両親の給料明細を見なさい。	教：指示する 生：教授資料②資料④⑤を見る	②	(・父は281700円 母は232100円)				
	・はるなさんの両親がもらった(口座に振り込まれた or 手渡しされた)金額はいくらか。	教：質問する 生：答える 教：説明する		○両親が実際にもらった金額のことを可処分所得(手取り額)という。 ○勤め先収入から、税金や社会保険料を差し引いた金額を可処分所得(手取り額)という。 可処分所得は、自分で自由に使い道が決められる。 ○様々な支出は、実支出と実支出以外の支払いに				

高等学校「家庭」における主体的・対話的で深い学びを目指すICTを活用した授業開発（Ⅰ）

	○支出とは何か。 ・ ○ノート56頁J(1)の説明を完成させなさい。	教：説明する 教：指示する 生：ノートの問題を解く	④	分けられる。 ○実支出は、資産を実質的に減らす支出である。 ○実支出は、生活費にあたる消費支出と、世帯の自由にはならない非消費支出とに分けられる。 ○実支出以外の受取は、一時的には支出に見えるが家計の資産となる支出である。	教員	理解を深めるため 分かりやすくするため	ス ラ イ ド (PowerPoint)	提示する
展開② 10分	◎はるなさんの家族の収支の分類と計算 ○先ほど確認した収入と支出の構成をもとに、分類しなさい。(個人作業) ○解答を確認しなさい。 ○はるなさんの家族の収入と支出の計算結果を確認しなさい。(個人作業)	教：指示する 生：分類する 教：教授資料⑥を配布する 生：確認する 教：指示する 生：分類する	⑤ ⑥ ⑤		生徒	Chromebook の操作に慣れさせるため	スプレッドシート	はるなさん家族の支出を分類する
展開③ 30分	◎課題の検討(個人→グループ→クラス→個人) (個人での検討) ・値上げを上げてもらうことは可能か。 ・なぜ、そのように判断したのか。	教：発問する 生：教授資料Jに記入する。	①⑤					
	(グループでの検討) ・グループで意見交流をしなさい。	教：指示する 生：話し合いをする	①⑤		生徒	話し合いの結果をクラス全体で共有するため	スライド	班での結論を打ち込む
	(クラスでの検討) ・話し合いの結果を班ごとに発表しなさい。(クラスでの検討)	生：発表する 教：発表内容をまとめる	①⑤		教員	話し合った内容をクラス全体で共有するため	スライド	生徒がまとめたスライドを提示する
	(個人での検討) ○はるなさんにアドバイスしなさい。	教：指示する 生：アドバイスを考える	①⑤	(・できないかと思ったが、支出を見直したらできそう ・節約したらよいと思う ・学校に事情を説明し、アルバイトができないのか相談してみる。) ・消費支出は節約できるかもしれないが、どれも削れない大切な費目である。 ・アルバイトも学校に1度相談してみるとよいかもしれない。 ・はるなさんの大学費用の貯金から出してもらうの(は)どうか。今はアルバイトができないけれど、大学生になれば自分で賄うことも可能なのではないか。				
終結 15分	◎まとめ・振り返り ・今日の学習の振り返りをワークシートに記入しなさい。 ◎アンケート ・授業後、授業評価アンケートへの回答をお願いします。	教：説明する 教：指示する 生：教授資料Jに記入する 教：指示する 生：アンケートに答え、提出する。	⑦⑧	・今日は、2つのことを行った。まず、家計を分析するために必要な「収入と支出の構造」について確認し、それを用いてはるなさん家族の家計を分析し、はるなさんへのアドバイスを検討した。	教員 生徒	理解を深めるため 分かりやすくするため 資源の削減。 端末の活用慣れるため	Power Point Google Forms	提示する 回答する

5. 第一次評価基準・評価方法

内容	方法	A 評価(十分に満足)	B 評価(満足)	C 評価(努力を要する)
家計の構成が理解できたか。	教授資料⑤	はるなさんの家族の収入と支出の種類や費目を正しく選択できている。	はるなさんの家族の収入と支出の種類や費目を正しく選択できなかったが、間違いに気が付き修正できている。	はるなさんの家族の収入と支出の種類や費目を正しく選択できていない。
	教授資料①	なぜ家計の構成について知る必要があるのか、授業で取り上げた以上のことを考察して説明できている。	なぜ家計の構成について知る必要があるのか、学習したことを踏まえ、説明できている。	なぜ家計の構成について知る必要があるのか、説明できていない。
収入と支出のバランスの重要性が理解できたか。	教授資料①	収入と支出のバランスに留意して、現実的なアドバイスができている。	収入と支出のバランスに留意して、アドバイスができている。	収入と支出のバランスに留意せず、実現可能なアドバイスをしている。
	教授資料①	なぜ収入と支出について考える必要があるのか、収入と支出のバランスの重要性に触れるとともに、授業で取り上げた以上のことを考察して説明できている。	なぜ収入と支出について考える必要があるのか、収入と支出のバランスの重要性に触れながら説明できている。	なぜ収入と支出について考える必要があるのか、説明できていない。
Chromebook を適切に操作できたか。	観察	困っている友人に教えたりしながらスムーズに操作できた。	友人から教えてもらいながら操作できた。	操作できなかった。
	授業評価アンケート(大問Ⅱ)	「5」「4」を選択した。	「3」を選択した。	「2」「1」を選択した。
支出を整理できたか。	GSS	困っている友人に教えたりしながらスムーズに整理できた。	友人に使い方や操作法を教えてもらいながら、整理できた。	整理できなかった。
	観察			
グループで協力できたか	スライド	相手の話を共感的に聞き、分担して話し合いを行い、話し合いの成果を、要点を絞ってまとめられている。	グループで話し合った内容が羅列できている。	グループ活動ができていない。

6. 教授資料

(教授資料③④⑦⑧は、紙幅の関係上、省略)

①ワークシート

◎今日の課題

はるなさん(高校2年生)は、45歳の正規雇用(正社員)の父と、45歳の非正規雇用(契約社員)の母、中学3年生(15歳)の弟の4人家族です。はるなさんのなりたい職業はキャビンアテンダントで、その夢を叶えるために英会話教室に通いたいと考えています。はるなさんは毎月5500円のお小遣いをもらっていますが、今のお小遣いの金額では、英会話教室の月謝10000円を払うことができません(資料①)。

そこで、はるなさんはお小遣いの使い方の見直しと、自分で収入を得る方法を考えました(資料②)。見直しについては、レンタルDVDや図書館の利用によって、毎月の支出をおさえることができそうということが分かりました。自分で収入を得る方法については、アルバイトをしようと思いましたが、高校の規則で禁止されているためできませんでした。今のままではお小遣いから月謝を支払うには、あと7300円足りません。

次に、はるなさんは、月々12300円のお小遣いをもらうことは可能か検討することにしました。はるなさんはお小遣いを7300円増やしてもらうことは可能でしょうか。はるなさんの立場になって、みなさんと課題を検討してみましょう。

①はるなさんはお小遣いを増やしてもらうことは可能か当てはまる方を丸でかこみましょう。

そのように判断した理由も書きましょう。

増やしてもらうことは可能である	増やしてもらうことは不可能である
<そのように判断した理由>	

②グループでの話し合い、はるなさんはお小遣いを増やしてもらうことは可能か当てはまる方を丸でかこみましょう。そのように判断した理由も書きましょう。

<話し合いの内容(メモ)>

グループでの話し合いの結果

増やしてもらうことは可能である	増やしてもらうことは不可能である
<そのように判断した理由>	

③クラスでの結論

増やしてもらうことは可能である	増やしてもらうことは不可能である
<そのように判断した理由>	

④はるなさんへのアドバイスを考えましょう。

--

⑤なぜ、収入と支出の構成(例 収入には実収入と実収入以外の受取がある、実支出の中心で生活費にあたる支出を消費支出という。)について知る必要があると思いますか。あなたの考えを書きましょう。

--

⑥なぜ、収入と支出について考える必要があると思いますか。あなたの考えを書きましょう。

--

⑦授業を受けて、考えたこと・感じたこと・思ったことなど何でもよいので自由に書きましょう。

--

高等学校「家庭」における主体的・対話的で深い学びを目指すICTを活用した授業開発（Ⅰ）

②教授資料

資料① お小遣い(収入 5500 円)と使用用途(支出)

使用用途(支出)	金額
友人との外食	1,300
映画	1,100
映画館までの交通費	600
おやつ・飲み物	1,000
雑誌	800
文房具・雑貨	500
合計	5,300

DVD のレンタルに変更！
おやつ・飲み物を半額に！
雑誌は図書館でかりよう！

資料②使用用途(支出)の見直し

用途	金額
友人との外食	1,300
DVD のレンタル	500
おやつ・飲み物	500
文房具・雑貨	500
合計	2,800

英会話の月謝 10000 円を加えると、 $2800 + 10000 = 12800$
月々のお小遣いから英会話の月謝を支払おうとすると $5500 - 12800 = -7300$
7300 円も足りない。

資料③ はるなさん家族の収入と支出

～収入～

内容	金額
父の勤め先収入	385,700
母の勤め先収入	275,000

～支出～

内容	金額	内容	金額
食料(穀物・魚介・肉・乳卵・野菜・海藻・果物・調味料)	45,800	家事用消耗品(洗剤・ポリ袋・サランラップなど)	4,300
お菓子	7,500	Wi-Fi 利用料	8,000
飲料	9,400	学校納入金など(はるな・弟)	17,900
外食	15,200	部活動費(はるな・弟)	5,800
住宅設備維持費	6,100	はるなのお小遣い	5,500
電気代	11,400	弟のお小遣い	3,000
ガス代	6,200	美容費(散髪代)	5,800
水道料金	7,300	家族でお出かけ	10,000
家事代行サービス	24,000	コンタクトレンズとその関連費(はるな)	7,000
スマホ使用料(父母はるな)	20,400	母のお小遣い	20,000
洋服	9,000	父のお小遣い	20,000
下着	2,500	住宅ローン	80,500
靴	5,000	両親の老後のための貯金	50,000
薬代	2,500	はるなの大学費用の貯金	27,000
両親の車のガソリン代	20,400	弟の高校・大学費用の貯金	35,000
新聞代	4,400	弟の給食費	7,400
高校までの交通費(はるな)	6,700	父の通院費	2,700
住民税		雇用保険	
厚生年金		介護保険	
健康保険		所得税	

資料④ 父の給料明細

勤怠	残業時間 (125%)	残業時間 (150%)	遅刻早退 回数					
意	0	0	0					

支給	基本給	役職手当	家族手当	住宅手当	通勤手当	時間外手当	総支給額
	330,000	30,000	0	14,900	10,800	0	385,700

控除	健康保険	介護保険	厚生年金	雇用保険	所得税	住民税	控除額
	25,900	4,700	45,300	2,600	6,500	19,000	104,000

差引支給額
281,700

資料⑤ 母の給料明細

勤怠	残業時間 (125%)	残業時間 (150%)	遅刻早退 回数					
意	3.5	0	0					

支給	基本給	資格手当	家族手当	住宅手当	通勤手当	時間外手当	総支給額
	234,000	30,000	0	0	3,800	7,210	275,000

控除	健康保険	介護保険	厚生年金	雇用保険	所得税	住民税	控除額
	9,200	1,700	16,000	800	3,100	12,100	42,900

差引支給額
232,100

⑤はるなさん家族の家計分類用 GSS

	A	B	C	D	E
収入			父の勤め先収入	385,700	
			母の勤め先収入	275,000	
			食料	45,800	
			お菓子	7,500	
			飲料	9,400	
			外食	15,200	
			弟の給食費	7,400	
			住宅設備維持費	6,100	
			電気代	11,400	
			ガス代	6,200	
			水道料金	7,300	
			家事用消耗品	4,300	
			家事代行サービス	24,000	
			洋服	9,000	
			下着	2,500	
			靴	5,000	
			薬	2,500	
			父の通院費	2,700	
			コンタクトレンズ(はるな)	7,000	
			両親の車のガソリン代	20,400	
			高校までの交通費(はるな)	6,700	
			スマホ使用料(父母はるな)	20,400	
			Wi-Fi使用料	8,000	
			学校納入金等(はるな弟)	17,700	
			部活動費(はるな・弟)	5,800	
			家族でお出かけ	10,000	
			新聞代	4,400	
			父のお小遣い	20,000	
			母のお小遣い	20,000	
			はるなのお小遣い	5,500	
			弟のお小遣い	3,000	
			美容費	5,800	
			住民税	31,100	
			所得税	9,800	
			健康保険	35,100	
			厚生年金	61,300	
			雇用保険	3,400	
			介護保険	6,400	
			両親の老後のための貯金	50,000	
			はるなの大学費用の貯金	27,000	
			弟の高校・大学費用の貯金	35,000	
			住宅ローン	80,500	
支出					

⑥はるなさん家族の家計分類確認用 GSS

	A	B	C	D	E
収入	実収入	経常収入	勤め先収入	父の勤め先収入	385,700
			勤め先収入	母の勤め先収入	275,000
			食料	食料	45,800
			食料	お菓子	7,500
			食料	飲料	9,400
			食料	外食	15,200
	消費支出		食料	弟の給食費	7,400
	消費支出	住居		住宅設備維持費	6,100
			光熱・水道	電気代	11,400
			光熱・水道	ガス代	6,200
	消費支出	光熱・水道		水道料金	7,300
			家具・家事用品	家事用消耗品	4,300
	消費支出	家具・家事用品		家事代行サービス	24,000
			被服及び履物	洋服	9,000
			被服及び履物	下着	2,500
	消費支出	被服及び履物		靴	5,000
			保健医療	薬	2,500
			保健医療	父の通院費	2,700
	消費支出	保健医療		コンタクトレンズ(はるな)	7,000
			交通・通信	両親の車のガソリン代	20,400
			交通・通信	高校までの交通費(はるな)	6,700
			交通・通信	スマホ使用料(父母はるな)	20,400
	消費支出	交通・通信		Wi-Fi使用料	8,000
			教育	学校納入金等(はるな弟)	17,700
	消費支出	教育		部活動費(はるな・弟)	5,800
			散策娯楽	家族でお出かけ	10,000
	消費支出	散策娯楽		新聞代	4,400
			その他	父のお小遣い	20,000
			その他	母のお小遣い	20,000
			その他	はるなのお小遣い	5,500
			その他	弟のお小遣い	3,000
	消費支出	その他		美容費	5,800
		税金	住民税	31,100	
非消費支出	税金		所得税	9,800	
		社会保険料	健康保険	35,100	
		社会保険料	厚生年金	61,300	
		社会保険料	雇用保険	3,400	
実支出	非消費支出	社会保険料	介護保険	6,400	
		預貯金	両親の老後のための貯金	50,000	
		預貯金	はるなの大学費用の貯金	27,000	
		預貯金	弟の高校・大学費用の貯金	35,000	
支出	実支出以外の支払		土地家屋借入金返済	住宅ローン	80,500